

2010年(平成22年)4月11日

産経新聞より



# 産経志塾

入学や入社など新たな季節の始まりを前に、若者の人間力育成を目指す「産経志塾」が3月25日から3日間、東京・大手町の産経新聞東京本社で開かれた。今回は講師として、拓殖大学学長の渡辺利

夫(70)、ジャーナリストの櫻井よしこ(64)、作家の関川夏央(60)の3氏が登壇し、元国連事務次長で国際文化会館理事長の明石康氏(79)を交えた昼食会も行われた。

# 日本は「国家」や「公」の観念再生を

20年前に冷戦が崩壊した当時、フランスス・フクヤマは名著「歴史の終わり」の中で、君主制、全体主義、共産主義など、古来、見られた政治統治の形態はそれ自体が持つ不合理性によって自滅し、「最終的には自由民主主義が勝利を収めた」と断言した。フクヤマは「歴史は進歩し続けるものだ」という進歩史観の立場におり、歴史は「終わり」を告げ、あとは自由民主主義が広がり、平穏な時代が続くと予測した。だが、現実はそのようなことはなかった。

目を日本の周辺に向けると、ロシアでは民主主義が定着せず、専制主義に回帰しつつある。中国もソ連の崩壊により、

北方の「脅威」から解放され、海洋進出が可能になり、地域的な覇権を握ろうとしている。今後、太平洋を支配する第7艦隊を持つ米国との間で、厳しい相克を生むであろう。朝鮮半島では南北統一のベクトルが働きつつある。

このような地政学の中にあって日本は、「国家」観念を再生させる必要がある。「国家」は今まで紡いできた歴史（時間）と領域（空間）がある。国民国家の時間と空間の間には「境界線を設けないほうがいい」とするポストモダンリズムの考えもあるだろう。だが、19世紀的なナショナリズムをたぎらせる東アジアの国々に囲まれた海の上に、そんな考えの強い日本がひとりポツンと乗っかって

いる構図は奇妙だ。「国家」の観念がなければ、

「国家」の観念がなければ、

日本が世界にどう向かっていくかの戦略は持ち得ない。まずは、これまでの歴史の教訓に学び、生かすことが現実的だ。この100年余りの歴史を振り返ると、日本の安全保障が完

全に守られた時代があった。一つは世界の7つの海を支配していた海洋国家の英国と同盟を結んだ明治35年から大正末期まで。この同盟のおかげで日本は日露戦争に勝利して「幸福」な時代が続いた。この間、大正デモクラシーが開花し、学術・芸術が振興され、産業も勃興した。だが、第一次大戦に勝利して

拓殖大学学長  
渡辺利夫氏



わたなべ・としお 昭和14年、山梨県生まれ。慶応義塾大学大学院修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て、12年、拓殖大学教授、17年から学長。日本安全保障・危機管理学会会長など。アジア研究の第一人者で『成長のアジア 停滞のアジア』（吉野作造賞）など著書多数。近著に『新 脱亜論』がある。「正論」執筆メンバー。

以来、欧米諸国に猜疑の目を向けられながら、大陸に深く関与していった時代の日本はまことに「不幸」であった。日本は大陸関与には抑制的でなければならぬ。

もう一つ、日本の「幸福」な時代がある。日米同盟に守られてきたこの60年ほどの現代だ。日本は覇権を持つ米国と同盟を組むことで、国の安全保障を完璧なものにできた。

今後日米同盟は外交の基軸とすべきだが、今は、日本側の怠惰で、同盟関係は非常に際どいものになっている。そうした現状を脱し、東アジアで日本が生存していくには何をなすべきなのか、議論を深めていく必要がある。

Q 外交政策でなく内政で政

治家を選ぶ風潮は問題ではないか

A 日本は人口的にも経済的にも非常に大きな国。選挙の際に内政が大きなテーマになるのは仕方ない。しかし、一得一失の内政と違い、外交はオール・オア・ナッシング。外交と安保の交渉は、政治家でなくプロに任せることが重要だ。

Q 経済の中心は中国に移りつつある。米国も中国寄りになるのでは？

A 経済的に親密だから、政治的にも中国に迎合する必要はない。ビジネスはビジネス。米国とカナダのように、政経分離が基本だ。

Q 東アジア共同体構想は成功するか

A 東アジアは共同体という制度がなくても、すでに強い結

びつきがある。最大の3カ国(日中韓)の政治システムや理念が異なっており、共同体の形成は難しい、望ましくもない。

▼学習院中等科、吉山貴士郎さん(15)「授業などで国際社会において日本が軽く見られていることを知り、以前からいらだちを感じていた。国際社会で日本がどうあるべきか、日米同盟を今後どうすべきかがわかり、すっきりした」

▼静岡学園高校、斎藤亮さん(18)「時事的な話題が多く、ためになった。日米同盟は消極的な選択肢として必要だとは思っている。しかし、基地ひとつでこれだけでもめるなら、今後長い期間をかけ、憲法を改正し、自主防衛を検討することも必要ではないか」